

Title	<書評>『日本近代美学序説』 金田民夫著 法律文化社, 1990年
Author(s)	吉岡, 健二郎
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 133-136
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52820">https://doi.org/10.18910/52820</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 『日本近代美学序説』

金田民夫著

法律文化社，1990年

1990年の9月、兵庫県立近代美術館は開館20周年を記念し、「日本美術の19世紀」展を開催した。入場者数はともかくとして、各地の美術館、博物館の学芸員や美術研究者の間では資料の面、及び問題提起の点で概ね好評だったようであり、雑誌「芸術新潮」の人気投票では1位を占めた。

19世紀後半の明治改元（1868年）から、ほぼ120年、太平洋戦争の敗戦から45年、日本という国は紆余曲折を経ながら経済大国となり、世界各国から驚異と羨望と嫉妬と恐怖、その他さまざまな感情をもって眺められるに至った。明治維新以降、欧米先進国に追いつくとばかり富国強兵を国是とし、先進国の対外政策を猿まねしてアジアの近隣諸国を侵略し、結局すべてを失って最初からやり直し、今度は経済的侵略を云々される仕末である。一体われわれは何をしているのだろうか。ポール・ゴーチャンの絵の題ではなが「我々はどこから来て、一体何者であり、そして何処へ行くのか」。

日本が経済的に成長しはじめた頃から、学問芸術の領域における我々の過去を再検討する傾向も強まってきたように思う。明治の画家、高橋由一、五姓田義松、黒田清輝、久米桂一郎、浅井忠等々についての展覧会が開かれたということは、それぞれの作家についての着実な研究が積み重ねられた結果であることは言うまでもない。またワーグマン、ピゴ、キョソネ、フォンタネージなど外国人芸術家に関する研究や展覧会、更にはフェノロサのような理論面で

の外国人教師についての研究など、ある距離を置いて眺められるようになった為か、急速に進んできた。これらの諸問題に関する先学の研究を前提としつつ新しい視点から19世紀の日本美術を眺め直したのが上記の兵庫県立近代美術館における特別展だったと考えられる。

さて美術という日本語は、ウィーン万国博への出品を呼びかける太政官布告（明治5年1月）の中で用いられたのが最初とされる。明治15年のフェノロサの講演の訳「美術真説」の場合もそうであるが、明治20年頃まで美術という語は現在の芸術の同義語として使われている。ところで美術と呼ばれるものが我々の美意識、或いは芸術意識の直接的表明であるとする美学とは何であろう。簡単に言えば、殆んど、或いは全く意識化されることのなかった美意識や芸術意識の明確化、乃至は自覚としての理論化といってよいであろう。少くとも、『日本近代美学序説』における金田の立場はそのようなものである。

我々は何を美しいと思うか、何を美術と呼ぶかと尋ねられたら、各人それぞれの思うところを述べればよい。しかしそれなら美とは何か、何故に或るものは美術作品と呼ばれるのか、美術とはそもそも何かといった問に答えねばならぬとしたら、それは容易なことではない。と同時にかかる問に対して理論的に答えて行かうとするのが美や芸術についての学、一般にエステティクスと呼ばれる学問分野に他ならな

い。そしてかかる学問が欧米先進国には存在するというを日本に紹介したのが、江戸から明治にかけ啓蒙家として大きな役割を果たした津和野藩医、西周（にし・あまね）である。金田の本書も第1部第1章“明治初期の美学”は西周の美妙学説（エステティックス）の紹介から始まっている。

『日本近代美学序説』は3部構成で、第1部“明治期における日本美学”，第2部は“日本の美意識と自然感情”，第3部は“明治美学史年表”となっている。そして全体への概観を与える序文が附されているが、これがまことに簡にして要を得ており、しかも自著の欠点も率直に自ら指摘しているので、書評をする側としては更に言うべき言葉が見当らず、いささか当惑してしまう。止むを得ず以下にいささかの読後感を述べ、また著者が意識的か無意識的か分明的でないが、省略したいくらかの事実を記述して責を果すこととする。

明治期の美学を歴史的観点から取上げた早い例としては土方定一の研究が挙げられる。彼は昭和8年『歴史科学』11月号に“大塚保治先生のこと”を書き、翌年『明治文学研究』3月号に“美学者としての大西祝”を、更に『早稲田文学』6月号に“島村抱月と明治美学史”を、『浪漫古典』7月号と『文学評論』8月号には、それぞれ“森鷗外と明治美学史”及び“森鷗外と原田直次郎”を掲載している。これらは1936年、西東書林という出版社から出された『近代日本文学評論史』に収められている。これは1947年、昭森社から体裁を変えて再刊され、更に1973年、法政大学出版局から小田切秀雄の解説その他を附し、新たな装の下、日本文学研究基本叢書の一冊と

して出版された。

土方の明治美学史研究は先駆的な仕事として高く評価されるべきであるが、このような仕事が可能となる地盤は、当時、ある程度まで整備されていたと考えられる。即ち吉野作造編の『明治文化全集』が昭和2年から刊行されており、そこには外国文学翻訳篇や文学芸術篇も含まれており、二葉亭の翻訳“ベリンスキーの芸術論”，菊池大麓訳の“修辞及び華文”，フェノロサの“美術真説”なども採録されているからである。

土方定一の仕事に続いて挙げらるべきは山本正男が雑誌『国華』第61篇、第5、9、10、12の4冊に掲載した“明治時代の美学思想”であろう。これは山本の著書『東西芸術精神の伝統と交流』（理想社 昭和40年）に収録されている。明治美学史を概観するには現在のところ、最も手頃な入門書であろう。土方の仕事と『明治文化全集』との間に想定されるような関係が、山本の仕事とそれに先立って刊行された開国百年記念文化事業会編『明治文化史』との間に推定される。

明治美学史を語る際にまず名を挙げられる西周の著作集は、麻生義輝が『西周哲学著作集』として岩波書店から昭和8年に刊行したものが最初である。ついで大久保利謙が昭和35年から『西周全集』全4巻を宗高書房より逐次刊行し完結させた。一方大西祝に関しては、彼の没後間もない明治38年、警醒社書店から『大西博士全集』全7巻が出ている。

金田が操山大西祝に特に高い評価を与えているのは、大西が元良勇次郎などと共に同志社英学校に学んだというだけではない

であろう。大西は新設の京都帝国大学理工科大学教育学講師に任命され、やがて開設さるべき文科大学学長に擬せられていた。しかし大西は反権力的で自由を尊重し、批判的精神に富むいわば在野的立場の人物であった。かかる点が金田の共感と呼んだのではないと思われる。大西のかかる姿勢は家永三郎のような人によって早くに注目され評価されている。また教育学への関心の深さと西洋哲学理解の確かさという点で高坂正顕も昭和30年代末から大西祝に注目している。

金田の本書にほんの少々先んじて、東北大学大学院を修了したばかり平山洋が『大西祝とその時代』と題する著書を日本図書センターから刊行した。これは上記の『大西博士全集』に未収録の多くの論文を発掘し、年譜を作成した点で、今後の大西祝研究には欠かせぬものとなるだろう。

以上の事実から理解できることは、大西祝という36歳で歿した俊秀が、多くの人々によって評価されてきたということである。金田の取上げ方に新しさがあるとすれば、それは美学者としての大西祝という側面を強調した点にあると言えるだろう。明治23年、外山正一は「日本絵画の未来」を発表し、思想画の発展を期待した。これに対して森鷗外は痛烈な批判を加え、外山は沈黙せざるを得なかったのであるが、大西も明治20年、「和歌に宗教なし」という論を『六合雑誌』に発表し、日本の詩歌の詠歎的で没思想的である点を指摘しているのだから、外山正一対森鷗外の論争では、外山に加勢してもよい筈であるが、そうはしていない。鷗外の理論展開の正当性を認めたのであろう。大西は批評的発言より、

むしろ美術の本質を問うことが日本の美術界の為になると考えていたのであろう。外山論文に先立ち、明治22年、大西は「我国美術の問題」と題する論文において「……我国美術の価値を定めんとするに於ても……中略……如何かの哲学的美学を論據とせざれば到底其終極の判断は下し得ざるべし」と述べ、「故に予は当今我国に美術の技を勵ますと同時に美術の学を勵まさんことを希望して止まず」と語っている。かかる大西の発言を金田は高く評価して明治期の本格的美学研究は大西に始まるとする。確かに彼は東大の最初の美学教授大塚保治の2年先輩として大塚に早稲田で美学の講義を行わせ、また早稲田において綱島梁川、島村抱月、金子筑水らを育てた。先駆者としての大西祝の功績は否定できないが、彼の論文の如何なる点が美学研究論文として評価できるのであるか、必ずしも明確に伝わってこない憾みがある。

金田の本書の特色は明治期の美学を語るに当って、あまりにも東京中心であった従来の敘述方式に対し、同志社をはじめ京都にゆかりのある人たちにも、それ相応の光を当てようとしている点に求められよう。かかる努力は中川重麗という殆んど歴史の中に埋没してしまい、今では知る人もない人物の発掘という仕事となって具体化している。

中川重麗（1849—1917）は俳人として一家をなしていたそうであるが、ドイツ語に堪能で、明治20年代前半から美学に関心を抱き、東京から京都に戻ってからは『京都美術協会雑誌』及びその後身『京都美術』に数多くの論考——但しその多くは翻譯や紹介であった——を発表しつづけた。明治

33年、京都市美術工芸学校の嘱託教員となり、明治42年、京都市立絵画専門学校の設立と共にその講師となっている。彼はF・Th・フィッシャーやK・ランゲの美学に依拠しつつ多くの論説を発表し、深田康算が京都帝国大学に美学美術史担当教授として明治43年赴任するまで、京都美学界の指導的人物であった。殊に彼が明治39年、東京の博文館から出版した『俳諧美学』は好評をもって迎えられ、短期間に4版まで重ねたという。美学理論を俳諧を具体例として挙げながら平易に説いたところが好評の理由だったと金田は推測しているが、どのような記述の仕方をした書物なのか説明や引用がないため、分らないのが残念である。

金田は日本人の美意識の特徴をなすもののひとつとして自然への親愛感を指摘している。俳人中川重麗は、江戸末期の生まれの人として日本的感受性豊かな人だったのであろう。西洋美学を摂取する際にも、恐らく伝統的な自然感情が根底に存したのであろう。恐らくそのような点で中川重麗が再検討するに値する人物として金田の視野に入ってきたのではないかと思う。金田自身、日本人の自然感情について多年に渉り関心を持ち続け、大西克礼はじめ先学の論考を参照しつつ論を展開している。それらが本書第2部にまとめられているわけである。これらの論文は明治期における西洋美学の受容に際し伝統的な日本の美意識が不知不識の中に取捨選択を行ない、また一種の濾過機能を果たしたであろうという、当然予想される事態を検討する為の周到な準備作業と受取れなくはない。18世紀以降の日本美術を考察するには比較芸術史的視点が不可欠と思われるが、明治維新後の学問・

芸術の考察にとっては、それは一層重要となる。本書はそのような研究のひとつとして極めて啓発的と思われる。

著者がこの春不帰の客となられ、明治美学史の続編を読む機会が奪われたのは痛恨の極みである。昨年、本書の書評を依頼されながら、個人的理由で1年延期したため、著者と意見を交換することができなくなってしまった。著者に対する非礼を御詫び申し上げる。

(吉岡健二郎 京都造形芸術大学)